『徳島新聞』2016年9月22日（木）［5面 オピニオン］

記者席

県立近代美術館 展示に工夫

県民に身近な場所に

徳島県立近代美術館で4日まで開かれた「暮らしの感覚展」。会場の床の一部に、電線の輪が張られていた。難聴者向けのアンテナ装置で、音声を電気信号に変え、補聴器や人工内耳に直接伝える仕組み。利用者は少なかったようだが、誰もが楽しめる施設づくりの一端に触れた思いがした。

同館は2011年から、障害者や高齢者、外国人らにも親しみやすい施設を目指す「ユニバーサル・ミュージアム」事業に取り組んでいる。これまで建物の案内表示を分かりやすく改善したほか手話通訳、幼児向け教材の開発などさまざまな工夫を凝らしている。

県立聾学校（現・徳島聴覚支援学校）での勤務経験がある亀井幸子学芸員の発案で、手話通訳付きの展示解説を行ったのが始まり。亀井さんは、障害がある生徒の指導に苦心した当時の反省を踏まえ、「誰でもウエルカムという雰囲気をつくりたかった」と振り返る。

最近は視覚障害者向けに美術鑑賞の機会を設けていると聞いて驚いた。平面作品の場合は絵の輪郭に凹凸を付けた物をつくり、目が見えなくても手で触って想像してもらう。展示解説は作品の色や形を細かく説明するだけでなく、実際に見た人のイメージを伝えることが大切という。学芸員にとっても、障害者からの問いかけが作品の見方を考えるきっかけになる。

実感するのは学芸員の心配りとアイデアだ。言うまでもなく、手すりやスロープを整えるだけでは人にやさしい建物にはならない。地道な活動が実を結び、障害の有無や年齢、国籍にかかわらず、美術館が県民により身近な場所になればうれしい。

（廣井和也）